

総合社会学による都市的世界 ——鈴木社会学から学んだこと——

金子 勇

1. 鈴木広先生との出会い

小学生のころから歌謡曲の古賀メロディと吉田メロディを愛唱しつつ、東京オリンピックが開催された中学3年生までバレーボールと橋・舟木・西郷・三田という四天王による「青春歌謡」に入れ込んだ。高校では加山雄三主演の「若大将シリーズ」における大学生活への憧れを抱きつづけ、ベンチャーズやビートルズのエレキサウンドに加えて、同世代のグループサウンズの世界しか念頭になかった¹⁾。

福岡県筑後地方の県立高校を卒業して、九州大学に入学したのは1968年4月であった。そこには若大将の「京南大学」とは異質の世界が広がり、数年前から全国の大学では「学園紛争」ないしは「学園闘争」も始まっていた²⁾。

映画の世界とは違う大学生活にもようやく慣れた6月2日に、米軍戦闘機が箱崎キャンパスに建設中の大型計算機センターに激突炎上した。それを契機として、九大総長を先頭にした全学デモによる板付基地撤去運動（“only 2 miles!”）が生まれ、福岡市内をデモ行進した³⁾。4月からの講義にほぼ出席していた私もしんがりですれに加わった。

2年生の1969年5月21日に大学立法反対を掲げた教養部学生大会で無期限ストが決定し、直ちに教養部が学生運動家によって封鎖されてからは、私でさえも文化や芸能より政治と社会が日常化した。なぜなら、全学無期限バリケード封鎖が敢行されて、一切の講義や演習がなくなったからである。封鎖は11月11日スト解除まで続いたので、私たち2年生は授業をほとんど受けることがなかった。

12月にレポート形式を主とした「試験」に臨み、哲学・史学・文学を嫌って社会学を希望した私が文学部に移行したのは1970年1月10日であった。第二外国語としたフランス語以外の新知識は皆無であり、入学後の2年間の知的後退はひどいものであった⁴⁾。

当時の手帳を見ると、1月12日社会学補講開始とあり、「社会的移動論」という題目の講義で、初めて鈴木先生と出会った。少し落ち着いた2月12日に開かれた社会学移行生歓迎コンパで自己紹介したところ、先生から「大川出身ですか!」と声をかけていただいたが、その時はもちろんこの言葉の背景にある約10年前の「大川調査」については何も知らなかった。

都市社会学では有名なA α 型の「釜石研究」の後、その対極にある零細企業集団型都市大川市の研究を先生がなさったのは私が小学5年生の時であり、その成果は1962年に『社会学評論』に発表されていた(鈴木ほか,1962)。その論文を探し、1970年8月に「釜石研究」が採録された『都市的世界』(誠信書房)を購入して、調査を主体としながらも理論的志向が強い先生の都市社会学に触れるようになった。合わせて非常に水準の高い都市社会学翻訳論文集『都市化の社会学』(誠信書房)が1965年に出ていたので、都市論から社会学を学ぶことにした。その背景には、家具の町大川から旧城下町柳川の高校に3年間自転車通学して、街並みの違いに驚いていたという個人的体験もある。

幸いなことに、時期的には先生が翻訳されたミルズ『社会学的想像力』(紀伊國屋書店)とリブセット・ベンディックス『産業社会の構造』(サイマル出版会)もあったので、これらの精読を3年生の夏休みあたりから開始した。先生の学部演習ではこの両冊とともに、大衆社会論の古典でもあるリースマン、コーンハウザー、リブセットらの名著も取り上げておられた。そうすると、マンハイム、パーソンズ、マートンらにも目が向くが、これらはいずれも大学院に進んでから読みはじめた。

ただ3年生の後期と4年生の前期の1年間、先生は外国に出張されることになった。ご帰国され、先生の講義と演習が再び始まったのは4年生の10月からだったので、この1年間は勝手に日本都市社会学の源流である鈴木栄太郎、奥井復太郎、磯村英一らの代表的作品を読み、ヴェーバーやワースの都市論を学んだ。それらの融合といえは聞こえがよいが、切り貼りで卒論を提出した。

3年生の2月に富士通に内定してはいたが、社会学の面白さにひかれるところがあり、卒論提出後に先生の研究室で進路相談をした。先生は、学間に大事なことは「能力よりライフスタイルだ」と答えられたので、卒論準備程度のライフスタイルでよければなんとかなると甘く考えて、大学院を受けた。3月1日の合格発表を見て、富士通に辞退届を出したら、福岡支店長から数回怒られたが、最終的には大学院に行くということで納得していただいた。

2. 大学院時代のご指導と学び

大学院に入学したのは72年4月であり、内藤先生も鈴木先生も八面六臂のご活躍をされていて、院生のご指導にも熱心であった。後年、私の『社会分析』（ミネルヴァ書房）の「書評論文」で、一回り上の世代の千石好郎氏はこの時代を「内藤—鈴木『家元』が最も輝いていた」と書かれた（千石，2011：76）。先生方にご迷惑をおかけした紛争世代の私たちが、諸先輩よりも「最も輝いていた」研究室の5年間を経験できたことは大変幸せなことであった⁵⁾。

修士課程1年から、私は先生のコミュニティ調査のお手伝いをするようになった。最初は唐津市のコミュニティ計画づくりであった。一緒に唐津市役所企画課を訪ねて、挨拶のしかたや名刺の出し方までも学んだ。帰りに唐津くんちの「曳山」を見学した。

修士課程2年の73年5月に先生がお作りになった「直方市民意識研究会」には、三浦典子氏と山口弘光氏とともに私も入れていただいた。私にとっては初めての都市コミュニティ調査であった。7月までに14回の研究会を行い、調査票の成案を得た。その席上で、先生が「コミュニティ・モラル」概念を提唱された。この学説史に残る概念誕生の機会に遭遇できたことは人生の宝であったので、そのエピソードを書いたことがある（金子，2011：7）。

8月31日から9月3日まで現地調査を行い、9月下旬までにデータクリーニングと集計をして、同時に執筆分担を決定した。ちょうど1年後の1974年8月から11月までにすべての原稿が完成した。そして、この直方研究は鈴木広編（1975）として刊行された。先生に直接都市調査のご指導を受けた貴重な2年間であった。

その中の2章を受け持った私は調査データ論文をまとめながら、修士論文の作業を並行させた。アメリカで過熱していたCPS（community power structure）論争

を学説史的に整理した理論編を前半でまとめ、直方での人脈を使い、CPS研究の「評価法」を応用した実証編を後半とした修士論文を74年1月に提出した。この1年間で、異なるテーマの異質なデータを同じ時期に分析して、原稿を書き分けるという訓練をしたことになる。

75年からの博士課程では先生が長年主宰されていた「移動研」に加えていただき、人吉市と大野城市と小倉北区での比較都市コミュニティ研究に従事することになった。ここでも直方研究の経験が役に立ち、膨大なデータを使って社会指標に関する章を執筆した。これは588頁の大冊として刊行され、2年後の1980年度に日本都市学会奥井記念賞を受賞した（鈴木広編, 1978）。

合わせて当時自ら追求していた都市政治社会学として「住民参加論の問題状況」を書き、先生にコメントをいただき、まとめなおして『社会学評論』に投稿したら受理されて、76年の博士課程2年の時に掲載された。これは「移動研」とは異質なテーマであり、同じ時期に違った論文を準備したことになる。したがって、大学院時代に二度にわたり異なるテーマを同じ時期に研究するという貴重な体験ができ、定年までそれは役に立った⁶⁾。

博士課程3年の1977年2月に、それまでの1年間非常勤講師をしていた久留米大学に、先生のご尽力により専任講師としての採用が決まり、4月から久留米に移った⁷⁾。

大学院時代の5年間、多方面の研究をされる先生のすぐ傍にいた私は、次第に先生の学問は都市社会学という狭い分野をこえた総合社会学であるという思いを強くするようになった。端的には鈴木広編（1975：はじめに；1）に接した時からである。なぜなら、そこでは「原則1」として「現代日本の社会変動について、AGIL図式を考え、経済・政治・社会統合・人間の社会化それぞれの領域でどういう変化が進行しているかを問題にしたい」とのべられていたからである。また「原則2」としては、「それぞれの領域間の関係でどういう変化が進行しているか」を明らかにすることが課題とされていた。院生当時は、この「原則1」「原則2」と都市コミュニティ研究の結びつきが理解できず、大いに悩んだ。

加えて先生の研究では、「原則3」として、トータルな把握の能力と同時に、ミクロ分析をも統合する能力が重視されている。両者を満たさないと、誇大な大風呂敷か瑣末な重箱の隅しか見えないからである。そして「原則4」として、客体

としての社会と社会の主体性の問題へのアプローチの同時共存がある。

ここにまとめた「4原則」は社会学の本格派を目指す限り、どうしても身につけたいことであった。もちろん「言うは易く行は難し」の典型でもあるので、少しずつ努力するほかはなかった。転機は先生が「高田先生の生家」『九州大学社会学会ニュース』(No.8 1975年5月)という短文をお書きになったところで得られた。一つは、このニュース編集の担当者が私であったことで、誰よりも早くその手書きの原稿を読むことができたからである。

もう一つは高田保馬の生家は佐賀県三日月町(現在は小城市に編入)だったので、私の大川市とは筑後川の東西の関係にあったからである。この事実を知り、ニュース編集後に高田保馬の生家を見に行った。その28年後の2003年に、生誕120年の記念にその社会学代表作品を3冊復刻して、『高田保馬リカバリー』(ミネルヴァ書房)まで刊行するとは夢にも思わなかった⁸⁾。

復刻版もリカバリーも、当時の佐賀県や福岡市や久留米市の古本屋で高田保馬本を丹念に集めた成果である。先生により「4原則」が活かせる理論社会学の方向性の一つとして、高田保馬の存在を教えていただき、それが30年かけて実を結んだというべきであろう。

3. 鈴木広先生の総合化された主題

2008年3月に先生の「喜寿の会」を企画したところ、50名近くの社会学者が参集した。その折に、小冊子を作り、その序文に先生の研究分野として7点に絞ったので、ご意見を伺ったことがある。それは、①都市化とコミュニティ、②社会移動と階層・階級、③宗教と社会階層、④アクション・リサーチと社会計画、⑤環境社会学と災害研究、⑥地域福祉と家族福祉、⑦過疎社会と炭住社会であるが、このまとめでよいというお返事をいただいた(『鈴木広先生「喜寿の会」発表レジュメ集』2008)。これらは先生の問題意識とともに、外部からの研究委託や時代の要請としていくつもの重複された理由により、選ばれた分野である。

総合化された主題は、丹念な質的量的社会調査によって収集されたデータの分析が基盤となった高水準の実証的研究であり、1980年の日本都市学会・奥井記念賞と1999年の日本都市社会学会・磯村記念賞はその証明である。

さらに実証的理論社会学ともいうべき翻訳が10冊近い。手元で確認できるのは

『都市化の社会学』（編集、誠信書房）、マンハイム「世代の問題」樺俊雄監修『マンハイム全集 3 社会学の課題』（潮出版）、ミルズ『社会学的想像力』（紀伊國屋書店）、リップセット・ベンディックス『産業社会の構造』（サイマル出版会）、リップセット『革命と反革命』（共訳、サイマル出版会）、ショート『世界の社会学』（社会分析学会訳編、恒星社厚生閣）、ボルダ『社会変革の挑戦』（監訳、ミネルヴァ書房）、ハンター『コミュニティ権力構造』（監訳、恒星社厚生閣）などである⁹⁾。

これらは社会学理論と都市的世界の実証研究の一部であり、具体的には学説・翻訳と調査の融合というかたちで様々な成果に結びついている。

それらから、修士課程から今日まで、私が直接学んだ学問的姿勢をまとめてみよう。まずは「総合社会学の研究と実践」である。私は先生の都市研究そのものが総合社会学であると理解してきた。先生と同世代の都市社会学者の方々は都市論に特化される傾向が強かったが、翻訳書の選択からも分かるように、先生は狭い都市論に自らを閉じ込めることなく、「現代日本の社会変動について、AGIL 図式を考え、経済・政治・社会統合・人間の社会化それぞれの領域でどのような変化が進行しているか」を常に研究されてこられた。都市社会学だけではなく、政治社会学、社会移動論、社会変動論などが翻訳されたことからそれが分かるであろう¹⁰⁾。

先生ご自身の表現では、「社会学のなかで、実証的に全体論の感覚を確保でき、しかもいつも実践に連動しうる可能性をもち、あらゆる社会学説や理論と現実的・具体的に人の生活現場を照合できるような分野が都市社会学」（鈴木、1992: 13）となる。まさしく総合社会学としての都市社会学が宣言されている。

私は語学の才能に乏しく、また外国語の本を日本語に移し替える作業に関心がなかったので、ヴェーバー、ジンメル、デュルケムの古典の精読とともに高田保馬やパーソンズなどの代表作品を学習して、社会変動を人口論を軸として考えてきただけであるが、これは私なりの総合社会学における「原則1」の実践のつもりであった。

1995 年以降急速に充実したコンピューターソフトである SAS、SPSS、エクセル統計のいずれでも、500 人規模の計量調査結果が簡単に集計できるようになった。その恩恵は大きいですが、事前の調査票の作成こそが成否を左右することは当時も今も真理である。私は科学研究費に依拠した訪問面接法による都市における質

問紙調査を1986年から定年までに15回行ったが、直方調査の際に先生から直接ご指導いただいた調査票の作成方法を順守してきた。そしてそのノウハウを、毎回手伝ってくれた北大の社会学専攻学部生、大学院生、助手、助教に繰り返し教えてきた。

調査結果は計量調査でもインタビューによる質的調査でも等しく得られる。直方研究とそれに続く人吉と大野城調査研究でも、先生の方法は両者の併用であった。計量データの直接的集計はなさらなかったが、私が身近にいた時代は西日本新聞社調査部の優秀なスタッフが代行して、そのデータ集を丹念に読みつつ、追加計算の指示を繰り返して出されるという手法であった。

一方で質的調査と計量的調査が組み合わされた研究も多い。2012年12月の社会分析学会大会（久留米大学）で、「調査人生の中で一番面白かった思い出深い」調査は「創価学会と都市的世界」であったと自らが断言された。それは「折伏の苦心談を聞き取りして、組織の膨張論を解明する」研究であり、総合社会学そのものであった。多くの観察結果は各種のインタビュー調査と先行する文献研究に依存するものであった。

私が質的調査と量的調査が融合した総合社会学とみるのは、その分析手法の多様性と成果の豊かさにある。移動効果、共同体の崩壊感覚、急性アノミー、疎外、集団治療、ユートピア、共同体の回復体験、組織同調、そしてAGILを活用した「組織無窮動モデル」の提示などに読み取れるのは、都市社会学という狭い分野をはるかに凌駕する広大な視点であった（鈴木, 1970: 259-335）。すなわちテーマも総合的であった先生は、仮説の豊富さと分析法の総合にも熱心であった。

このように調査については多くを教えていただいたが、ライフスタイルとしても学んだのは論文執筆と報告書作成の同時並行という方法であった。ワープロやパソコンがない時代、先生の研究室にお邪魔すると、いつも書き物をされていた。それは翻訳はもとより、繰り返される社会調査により収集されたデータの解説とともに、それを活用した雑誌論文原稿ではなかったか。

報告書と論文の区別はあるにしても、いずれにしてもたくさんのデータをいつもご覧になっておられたので、学会大会発表の頻度も高かった。日本社会学会だけではなく、日本都市社会学会、日本社会分析学会、西日本社会学会の大会でも登壇されることが多かった。

1992年3月に出された先生の還暦記念論文集（Ⅰ・Ⅱ）には43人の弟子と関係者が論文を寄稿した。冒頭には先生の英語論文とともに略歴と業績目録が掲載されて、学会役割活動も記されている。それによると、1966年に日本社会学会理事に初当選され、以後理事4期満了までの期間で、社会学評論編集委員会、研究活動委員会、社会学教育委員会などを歴任されている。そして、1982年には日本都市社会学会を創設され、より細かな分野の学問の水準の向上と後進の育成にもご尽力された。

その一環として、翻訳の実行と社会学テキスト作成が挙げられる。いずれも私ができなかったものであり、既述した10冊近い翻訳書とともに、『社会学を学ぶ』からはじまったテキスト作成が指摘できる。詳細は「参考文献」に譲るが、書名だけをかかげれば、既述した『現代社会の人間の状況』、『人間存在の社会的構造』、『社会理論と社会体制』を経て、『都市社会学』、『社会学群像』、『リーディング日本の社会学 7 都市』、『現代社会を解説する』、『都市化の社会学理論』、『現代社会学群像』、『現代都市を解説する』、『社会学と現代社会』などが陸続と出版された。これらは社会学、都市社会学、社会学史の3つの分野にまたがっている。

そして21世紀になってから「シリーズ社会学の現在」として3冊の監修本が出された。『理論社会学の現在』、『地域社会学の現在』、『家族・福祉社会学の現在』がそれである。これは先生のご判断で、当時内容にもっともふさわしい研究者に寄稿を求めて刊行された3部作である。

私たちがまた先生の古希を記念して、九大で都市研究をご指導いただいた8名と日本都市社会学会の若い世代の9名が寄稿して鈴木広先生古希記念論集刊行委員会編（2001）を刊行した。先生にも「アーバンイズム論の現代的位相」を書いていただくことが出来た。このなかで先生はアーバンイズムの総合社会的アプローチを説かれ、消費を取り上げて、その延長線上に少子化と環境の劣化を指摘されている。先生の結論では、「個人の自由が価値判断の基準とされる限り、マクロ的な全体社会の持続がそのミクロの判断基準に算入されるプロバビリティはほとんどない。世界の状況にラディカルな変更がない限り、少子化という傾向に転換が起こる条件は、目下の都市社会には存在しないのである。だから近代は自滅過程を不可避的にたどることになる」（鈴木, 2001: 12）。

私は同じ本のなかで、「男女共同参画社会」の「ラディカルな変更」として「子

育て共同参画社会」を提唱して、2年後に制度として「子育て基金」を提唱した（金子, 2003）。それに対して先生から『西日本社会学会年報』第2号（2004）で丁寧な「書評」をいただいた。73歳の先生から54歳になった弟子への「書評」それ自体がたいへんありがたいことであった。しかも「著者30年の研究生活で得たすべてが見事に結集した総括の書である」、「論述は平易、データは豊富、社会学の本としては珍しく分かりやすい上、主張が明快なので説得力がある」と褒めていただいたことは著者冥利に尽きる¹¹⁾。

合わせて5つの課題、すなわち①少子化のマクロ社会学的な理論化、②少子化する外国の事例研究、③高度資本主義社会システムが少子化を導き出す過程への「介入」の問題、④高田保馬の「第三史観」の理解方法、⑤環境破壊と人口減・社会消滅、を教えていただいた。それから10年間で、②についてはフランス研究を少し行った（金子, 2007）。③については「国家先導資本主義論」を展開して、④では連結思考の重要性を主張しつつ、マンハイムの「時代診断」を現代的に応用した（金子, 2013）。また、⑤では環境問題としての二酸化炭素地球温暖化論と自然エネルギー問題を取り上げるようになった（金子, 2012）。①についても『社会分析』（2009）や『コミュニティの創造的探求』（2011）で試みたが、まだ不十分なままである。

4. 鈴木社会学の継承

学説史に燦然と輝く「コミュニティ・モラル」と「コミュニティ・ノルム」は、ぜひ継承したい社会学界の共有資産である。とりわけその造語の瞬間に同席させていただいたものとして、この思いは格別である。その意味で、7つに大別される先生の社会学研究分野のうち、「都市化とコミュニティ」を軸として以下検討したい。

まず1973年直方研究では「コミュニティ・モラル」を誕生させられたが、「コミュニティ・ノルム」はまだ提唱されていなかった。その経緯を調べてみよう。手掛かりの一つは、直方研究が一段落した直後にお一人で書かれた『長崎市の都市構造と市民意識』（長崎市、1975年5月）にあり、『都市化の研究』にその一部が採録されている。長崎市研究は、1974年からお使いになった分析軸である「土着と流動」および「コミュニティ・モラル」のパラダイムによる詳細なコミュ

ニティ調査であり、直方研究と人吉・大野城研究を媒介する内容が豊富にあるが、「コミュニティ・ノルム」への言及はまだない。

その萌芽は翌年の『都市構造と市民意識—福岡市民意識調査』（福岡市 1976 年 3 月）で認められる。先生は 1975 年に 7 月に実施された福岡市調査に全力を投入され、都市社会学のコミュニティ、集団構造、市民参加などの重要なテーマをすべて盛り込まれた。「コミュニティ・ノルム」への直接的言及はまだないが、今でも新鮮な「コミュニティ・モラル・ディレクション」というアイデアが打ち出されている。これは「コミュニティ・モラルのDL理論」とも表現された^{1 2)}。

調査票全体には総合社会学性が濃厚に認められる。ミルズのいう全体社会への配慮はもちろん、そこでの個人生活の位置づけにも等しく配慮がなされている。まさしく「一つの観点から別の観点へと移る能力」（ミルズ、1959=1965: 9）が都市調査のなかで体现された。大学院の演習でもしばしば言及されたマートンの中範囲理論の立場で、コミュニティの総合比較社会学を实践され、人間生態学、社会心理学、都市計画、人口論なども駆使されている。

人口動向、生活環境、行動特性（投票行動分析、友人と近隣のインフォーマル関係、町内会、サークル型団体、住民運動型集団を含むフォーマル関係）が具体的なデータに基づき論じられ、以下のような発見が示された。

- ① 既成集団の欠落が住民運動を発生させる。
- ② インフォーマル関係の豊かさが、住民運動加入の促進剤になっている。
- ③ 生活要件の上昇が展望できるときには、運動参加者が増える。

報告書の分担執筆者は三隅二不二先生だけであったが、その担当箇所が軽く書かれていることと対照的に、先生の分担章からはデータ分析の細やかさと表現の緻密さなかならずと文体のもつスピード感と圧倒的な迫力が感じられる。

この報告書でコミュニティ・モラルのDL理論が初めて体系化されたのである。私は奥井賞を受賞された『コミュニティ・モラルと社会移動の研究』はもちろん繰り返し読んできたが、「1977 年 8 月 22 日拝受」と自分で書き込んだこの『都市構造と市民意識』もまた同じように精読してきた。予算年度内の 1976 年 3 月刊行という表記ではあるが、報告書本体が 220 頁もあり、実質的には脱稿されるまで 2 年近くかかれたのであろう。

報告書では「コミュニティとは、社会体系を地域というアスペクトで把握した

場合のターム……したがって地域社会体系といい換えても差し支えはない……われわれの社会生活・共同生活状態を地域という角度でとらえたとき、それをコミュニティという」(1976: 31)と定義されている。この指摘は重要である。また類似の表現も多い。「コミュニティは社会状態であり、<モノ>は<ヒト>のために対象化されるのだから、ここでは<ヒト>の方に比重をおいて考える」(同上:33)。「コミュニティは何らかの『集積』状態である」(同上: 33)。これらの認識は、同時進行していた人吉と大野城での都市コミュニティ比較研究でも用いられた。

そして、『望ましい』コミュニティ状態を、維持し、創出しようとする態度は、人によって積極的だったり消極的だったりする。この態度を軸として、コミュニティ意識を把握するとき、コミュニティ・モラルという」(同上: 33)とのべられた。調査票では具体的に「地域にかんする認知」、「地域との同一化」、「地域に対する評価」と表現され、これらはモラルの量的な高さであるとまとめられた。そして、「コミュニティのあるべき姿」をべつに用意され、「モラルの質」として位置づけられた(同上: 34)。

この後にいよいよ「モラルの質」について言及される。すなわち、実態としてのコミュニティにかんする意識、理想としてのコミュニティにかんする意識、実際の行動にあらわれたコミュニティ性を類別され、「この複合物としてモラルというタームをつかう」(同上: 34)とされた。この分類は人吉・大野城調査では見られない使用法である。

これらの準備を経て、「Direction (方向性)はコミュニティ理想意識(D)であらわし、Level (水準)はコミュニティ実態意識(L)であらわす」(同上: 34)が登場する。この背景には奥田「コミュニティ・モデル」批判があり、人吉・大野城調査でも踏襲されるパラダイムになる。

ただし「コミュニティ・ノルム」ではなく、「コミュニティ・モラルを水準(量)と方向(質)の複合状態」(同上: 34)と考えるという表現に終始されている。今日私たちが共有している「コミュニティ・ノルム」は「コミュニティ・モラル・ディレクション」とされ、その質問項目は以下の通りであった(同上: 91)。

「A 平準・格差」

- (甲) 自分の住んでいる地域の利益ばかり考えないで、非常に困っているよその地域のことを第一に考えてやるべきだ。
- (乙) やはり自分の地域の利益を第一に考えるのはあたりまえである。よその地域のために自分のところが損をする必要はないと思う。

「B 改革・伝統」

- (甲) どんな地域にもくらしのモトになる「しきたり」がある。しきたりはなるべく守って、人の和をこわさないことが大切だ。
- (乙) しきたりをただ守るよりも、みんなが討論して新しいしきたりを作りだしていかないと進歩がないと思う。

「C 主体・客体」

- (甲) 新しい住民も、もとのからの住民にとっても、地域は生活の大切なよりどころであるから、住民がお互いにすすんで協力し、住みやすくするよう心がけるべきである。
- (乙) しかし現実には、そこに永住しないひとなど、地域への関心もうすい人が多いので、もとのからの住民や熱心なリーダーに、なるべくまかせた方がかえって万事うまくいく。

同時進行していた人吉・大野城調査では、コミュニティ・モラルは

- ・「インテグレーション（統合）因子」：町のひとびとのまとまり、リーダーは地域のためにやっている、地域の人はお互いに世話しあっている。
- ・「アタッチメント（愛着）因子」：自分の町の気がする、地域の悪口は自分の悪口の気がする、この町が好きだ。
- ・「コミットメント（関与）因子」：町のために何かやりたい、一緒にする行事（運動会、寄付、清掃）に参加する方である、町内、校区内ですること（役員改選、年中行事、道路工事）に関心がある。

とされていた（鈴木編, 1978）。

一方、コミュニティ・ノルムは

・主体・客体(voluntarism—nonvoluntarism active-passive)

主体 (A) 私は地域の人とは進んで協力し、住みやすくするよう、できるだけ努力している。

客体 (P) 私は地域のことはあまりわからないので、よく知っている熱心で有能なリーダーにまかせたほうがかえってうまくいくと思っている。

・特殊・普遍 (localism—cosmopolitanism)

特殊 (L) 日本全体がよくなることも重要だが、何よりもまず自分の住んでいる地元をよくしていきたい。

普遍 (C) 地元のことも大切だが、やはり今のような時代には、日本全体をよくするほうが先決である。

・格差肯定・平準志向 (discrimination—equalization)

格差 (D) 自分の地域の利益を第一に考えたい。

平準 (E) 非常に困った問題のある他の地域をまず考えたい。

であった(同上)。だから、福岡市調査のあとに先生ご自身のお考えが変化して、「コミュニティ・ノルム」へと進まれたのであろう。

2012年12月に行われた日本社会分析学会大会(久留米大学)で、「コミュニティ・モラルのDL理論」から「コミュニティのDL理論」へと進まれなかった理由をお尋ねした。これは長い間気になっていたからである。はっきりしたお答えはなかったが、かりにコミュニティ・モラルは「L」レベル、コミュニティ・ノルムは「D」レベルとすれば、社会システム(役割構造:資源配分、人員配分、価値システム)もまた、「L」レベル(資源配分、人員配分)と「D」レベル(価値システム)で組み立て可能であり、そこに新しい社会学の展開の可能性があると思えるので、これからもこの点は継承したいと考える。

その他にも先生独自の社会学概念はいくつかある。一つは「私化」現象に付随した「たえず全体化する全体性、たえず私化する私性」という分析軸が指摘できる。これは鈴木(1970:173)ですすでに出されている。常に「社会体制と私生活の関連の仕方の変化」を同時に観察される先生だからこそ可能であった。興味深いことにこの時点では、「たえず全体化する全体性(サルトル)とたえず私化する私性(privacy)」という表現になっていた。しかしこれが鈴木編(1975)では、「サ

ルトル」や (privacy) という注記が消える。逆に説明が詳しくなり、「戦前の日本社会では私的な主観性はいつも『たえず全体化する全体性』という客観的過程のなかに包摂されていた。いま、主観的な私的な世界を完全に展開させたものは、ほかならぬ体制＝たえず全体化する全体性の客観的世界である。相互に前提し合っているこの二重過程は、たがいに相反する方向に、たえず遠ざかっていく。しかも、解体なしにはけっして分裂することはない」(鈴木編, 1975: 264)。

その後、研究活動委員会での「日本社会の現状分析」を経て、『社会学評論』134号(1983)の特集でも期せずして「私化」が中心的論点になり、先生の総括が掲載され、それは3年後の鈴木(1986)の「補説」として採録されている。

もう一つは1986年に公表された「ボランティア活動のK(C)パターン」の発見である。これは当初「階層的二相性」として提起された。すなわち収入・学歴・階層の高さに比例して増えるボランティア行動をVパターン、逆の下層的要因をもった伝統的な相互援助行動をΛパターンとして、合成した地点にKパターンが存在するとされた(鈴木, 2001: 289-291)。これは1981年の福岡県民調査結果から発見されたという意味でも、先生は「調査の達人」なのであった。しかも、データを精査して、KではなくCパターンと表現を変えられた。先生の文章では「KはVとΛとCとの合成」(傍点原文、同上: 292)となる。

5. 学術面の特色

大学院から北大定年まで、先生への学恩は言葉に尽くせないほど常感じてきた。福岡県生まれの私が九大に入学して、社会学を専攻して先生と出会い、久留米大学から北海道に移り、そこで定年まで勤務したことは偶然の連続であるが、それは北海道のご出身の先生とは逆のコースを辿ることであった。北海道に移った直後は倉沢進先生や高橋勇悦先生からよくそれを指摘されたものである。「北海道生まれ、福岡暮らし、勤務の最後は久留米大学」の先生の反対のコースを偶然に選択した感慨は今でも強い。

久留米大学から北大定年までの36年間、論文や著書をまとめることには努力してきたほうだが、その原動力は先生に読んでいただけるからであった。大学院時代毎年3月に提出する「年次レポート」がその原点であった。そして必ず早い時期にハガキで簡単なコメントがいただけることが楽しみでもあった。

最後に、学問と芸術の共存について触れておこう。嘉徳劇場については残念ながら私は何も知らない。しかし、大学院生時代から傍で拝見していると、先生は歌がお好きであり、なかでも歌曲を好まれるように思われる。1994年3月末の九大退官記念のパーティが「鈴木先生を聴く会」であったように、端的には「からたちの花」、「浜千鳥」、「初恋」、「砂山」、「落葉松」などをよくお歌いになる。しかし、カラオケがない1970年代中期でも中洲の店ではギター伴奏で歌謡曲を時々歌われていたし、北大に集中講義で来ていただいた際に行ったカラオケの店では、主に歌謡曲を熱唱された。ススキノでは「大利根月夜」、「天城越え」、「夢芝居」の歌声が強く印象に残っている。

私は小学生のころから歌謡曲を口ずさんできた。そして30年かけて、ヴェーバーの「音楽社会学」を勝手に応用して『吉田正』（ミネルヴァ書房, 2010）を書いた。もとより「下手の横好き」だったが、1年後にお会いした際に先生は「大変難しい音楽社会学をよく書きましたね」とおっしゃったのである。少子化の「書評」をいただいた時と同じく、以て瞑すべしであろう¹³⁾。

注

- 1) このうち形になったのは、30年以上も温めていた吉田正論だけである（金子, 2010）。なお、オリジナルな歌を4曲収録したCD『北の恋心』制作（2003）もこれに含まれるかもしれない。
- 2) 東大の安田講堂が「落城」したのは1969年1月であり、その年3月の東大入試は中止になった。
- 3) 鈴木先生の研究室のドアにもこの標語のポスターが貼り付けられていたと記憶する。
- 4) 当時は岩波新書、中公新書、講談社現代新書しかなく、ほそぼそとこれらから数冊を購入して読んでいたに過ぎない。
- 5) この世代を先生は「孤独な無宿者の群」とみられ、国内に「準抛集団」をもたない「非日本人」とされた。そして、この世代こそが「戦後」であり、「異常で、ショッキングな、とても理解できない、日本人とは関係のない野蛮な異分子のように見る」（『朝日新聞』1972年6月10日）と結論付けられた。修士課程1年時の切り抜きを残してきたのは、「この世代」の一員である私のショックが大きかったからである。

- 6) 1993年に『マクロ社会学』と『都市高齢社会と地域福祉』、2006年に『少子化する高齢社会』と『社会調査から見た少子高齢社会』を同時に刊行した際にもこの体験が役に立った。
- 7) 詳しくは金子(2011b)を参照。
- 8) ちょうど10年後にこれらは重版された。今でも若い人々にすこしずつ読んでいただけているようである。
- 9) 翻訳書の選定に理論社会学が多いことから都市社会学の分野に限定されない総合性が感じ取れるであろう。なお、マンハイムの『世代・競争』(誠信書房, 1958)は手元にないために、1976年のマンハイム全集の方を掲げた。
- 10) ここで同世代の都市社会学者と見なしているのは倉沢進、奥田道大、高橋勇悦などの諸先生である。
- 11) これは現在のところ品切れであり、再版の見込みはない。
- 12) ディレクションとレベルを組み合わせる考え方は社会学の中では皆無であったので、当時も今も私は大いに気になりつつもまだ体系的に考察していない。
- 13) 私はこれまで2回、鈴木広先生について書いたことがある。一つは1992年3月の「九州大学社会学同窓会ニュース」であり、「鈴木先生と私」というタイトルであった。もう一つは社会調査協会編『社会と調査』第11号(有斐閣、2013年9月)の「調査の達人」コーナーに、「コミュニティ研究にみる総合社会学の精神」という1500字の短文を発表している。

参考文献

- 金子勇, 1982, 『コミュニティの社会理論』アカデミア出版会。
金子勇, 1993, 『都市高齢社会と地域福祉』ミネルヴァ書房。
金子勇, 2003, 『都市の少子社会—世代共生をめざして』東京大学出版会。
金子勇, 2006a, 『少子化する高齢社会』日本放送出版協会。
金子勇, 2006b, 『社会調査から見た少子高齢社会』ミネルヴァ書房。
金子勇, 2007, 『格差不安社会のコミュニティ社会学』ミネルヴァ書房。
金子勇, 2009, 『社会分析—方法と展望』ミネルヴァ書房。
金子勇, 2010, 『吉田正—誰よりも君を愛す』ミネルヴァ書房。
金子勇, 2011a, 『コミュニティの創造的探求』新曜社。
金子勇, 2012a, 『環境問題の知識社会学』ミネルヴァ書房。
金子勇, 2013, 『「時代診断」の社会学』ミネルヴァ書房。
金子勇編, 2003, 『高田保馬リカバリー』ミネルヴァ書房。

- 金子勇・長谷川公一, 1993, 『マクロ社会学』 新曜社.
- 金子勇, 2011b, 「時代を切り取る社会学」 金子ほか『社会学の学び方・活かし方』 勁草書房: 3-66.
- 金子勇, 2012b, 「少子化する都市高齢社会」『都市社会研究』 No.4, せたがや自治政策研究所: 1-20.
- ミルズ・鈴木広訳, 1965, 『社会学的想像力』 紀伊國屋書店.
- リップセット&ベンディックス・鈴木広訳, 1969, 『産業社会の構造』 サイマル出版会.
- リップセット・鈴木広ほか共訳, 1972, 『革命と反革命』 サイマル出版会.
- ショート・社会分析学会訳編, 1986, 『世界の社会学』 恒星社厚生閣.
- ボルダ・鈴木広監訳, 1987 『社会変革の挑戦』 ミネルヴァ書房.
- ハンター・鈴木広監訳, 1998, 『コミュニティ権力構造』 恒星社厚生閣.
- 鈴木広ほか, 1962, 「零細企業集団型都市の社会分析」『社会学評論』 13 卷 1 号 有斐閣: 59-84.
- 鈴木広訳編, 1965, 『都市化の社会学』 誠信書房.
- 鈴木広ほか, 1970, 『都市的世界』 誠信書房.
- 鈴木広ほか編, 1970, 『社会学を学ぶ』 有斐閣.
- 鈴木広編, 1975, 『現代社会の人的状況』 アカデミア出版会.
- 鈴木広編, 1975, 『現代地方都市の位置と課題』 直方地域開発懇談会.
- 鈴木広ほか編, 1977, 『人間存在の社会学的構造』 アカデミア出版会.
- 鈴木広編, 1978, 『都市化の社会学』 [増補]誠信書房.
- 鈴木広編, 1978, 『コミュニティ・モラルと社会移動の研究』 アカデミア出版会.
- 鈴木広編, 1980, 『社会理論と社会体制』 アカデミア出版会.
- 鈴木広ほか編, 1984, 『都市社会学』 アカデミア出版会.
- 鈴木広ほか編, 1985, 『社会学群像』 アカデミア出版会.
- 鈴木広ほか編, 1986, 『リーディング日本の社会学 7 都市』 東京大学出版会.
- 鈴木広編, 1987, 『現代社会を解説する』 ミネルヴァ書房.
- 鈴木広ほか編, 1987, 『都市化の社会学理論』 ミネルヴァ書房.
- 鈴木広ほか編, 1990, 『現代社会学群像』 恒星社厚生閣.
- 鈴木広編, 1992, 『現代都市を解説する』 ミネルヴァ書房.
- 鈴木広ほか編, 1993, 『社会学と現代社会』 恒星社厚生閣.
- 鈴木広監修, 2000, 『理論社会学の現在』 ミネルヴァ書房.
- 鈴木広監修, 2001, 『家族・福祉社会学の現在』 ミネルヴァ書房.
- 鈴木広監修, 2002, 『地域社会学の現在』 ミネルヴァ書房.

- 鈴木広, 1972, 「非日本人の出現」『朝日新聞』6月10日.
- 鈴木広, 1975, 「高田先生の生家」『九州大学社会学会ニュース』(No.8 1975年5月): 2.
- 鈴木広, 1992, 「都市社会学への入門」鈴木広編, 1992, 『現代都市を解説する』ミネルヴァ書房: 1-13.
- 鈴木広, 2001, 「アーバニズム論の現代的位相」鈴木広先生古希記念論集刊行委員会編, 2001, 『都市化とコミュニティの社会学』ミネルヴァ書房: 1-15.
- 鈴木広, 2002, 「ボランティア的行為における“K”パターンの解説」鈴木広監修『家族・福祉社会学の現在』ミネルヴァ書房: 274-294.
- 鈴木広, 2004, 「書評 金子勇『都市の少子社会—世代共生をめざして』東京大学出版会」『西日本社会学会年報』第2号: 175-177.
- 鈴木廣先生還暦記念論文集刊行委員会編, 1992, 『鈴木廣先生還暦記念論文集』(I II).
- 鈴木広先生古希記念論集刊行委員会編, 2001, 『都市化とコミュニティの社会学』ミネルヴァ書房.
- 鈴木広先生喜寿の会世話人編, 2008, 『鈴木広先生「喜寿の会」発表レジュメ集』.
- 千石好郎, 2011, 「書評論文 日本社会学の現状打破への熱い想い: 金子社会学の中間決算書 金子勇『社会分析: 方法と展望』『西日本社会学会年報』第9号: 75-81.